

は、あるいみで学知生成基盤の多様性の自覚であり、自らのそれを含むあらゆる制度の相対視をもたらすだろう。しかるべくなされた自己相対化は、自らの営みのかならずしも気づかれていない諸前提を明るみに出してくれる効果がある。とともに、自らの置かれている状況や制度とは大きく異った学知探求のかたちがありうることに気づかせてくれる。このことは、自己認識の深化をもたらすとともに、自己と他者に共有の問題の存立地平を探り出す思索をも喚起するだろう。ビザンティン世界での教会典礼の宇宙論的構造を論じた秋山報告への意見の中に、哲学的論述に結実する *logos* による *sophia* の探求ないし表現（著作）だけではなく、典礼という *praxis* による *sophia* の探求ないし表現もあることを指摘する発言があった（柴田有氏）。大学の講義と教会の典礼という形態の差異は大きいし、それを生む制度のあり方も大いに異なる。しかし *sophia* 探求のこの二つの姿は、協和し、どこかで収斂するものとも考えることもできるだろう。

---

## ビザンティン世界における「知」の共同体の構造

——写本伝承活動と宇宙論的典礼を基点に——

秋 山 学

### I

ビザンティンにおける「ルネサンス」の時期と呼ばれるマケドニア朝時代は、867年に即位したバシレイオスI世(在位867-886)によって創始される。彼は、726年に始まり787年に一旦終息し、814年に再燃し843年に再終息した聖画像破壊運動後の時期を回復に向かわせ、ビザンティン帝国の国力を充実させた。そして「マケドニア朝ルネサンス」と呼ばれる文化的開花の時期は、その子である賢人皇帝レオVI世(在位886-912)と、孫であるコンスタンティノスVII世ポルフィロゲネトス(在位945-959)の2代において開花し、とりわけポルフィロゲネトスの時期に古典復興の機運は高まりを見せる。彼は、学問全般に強い関心を示して百科全書主義的傾向を見せ、古典著作家の諸作品を集め筆写させた。実際、現存する古典ギリ

シア語諸作家の最古の写本としては、この時期のものもしくはその次の代の写本、すなわち 10 世紀または 11 世紀に遡るものがほとんどである。

いまアリストテレスの伝承に注目してみると、論理学書すなわち「オルガノン」に関しては、その知識が中世初期を通じて広く流布していたことが知られ、その写本は多数存在する。10 世紀以前に遡ると思われる写本だけに限っても、B(ヴェネツィア 201, 954/5 年)、A(ヴァティカン〔ウルビノ〕35, 9/10 世紀〔888-901〕)、n(ミラノ L.93, 9 世紀)の3種が挙げられる。これらのうち A 写本は副助祭グレゴリオスの手で写されたもので、これはカエサリアの大司教アレタス(849/50-944)の蔵書の中に含まれていたことが知られている<sup>1)</sup>。全 440 葉のうち、第 1 葉より第 20 葉まではポルフュリオスの『イサゴギー』テキストを含み、その後アリストテレスの「オルガノン」を順に収めており、その組成が注目される。なぜならポルフュリオスの『イサゴギー』を先行させ、その後アリストテレスの「オルガノン」を順に配する、というあり方は、もとよりポルフュリオスが『範疇論』への「導入」として『イサゴギー』を記した意向に沿うものであるが、後ほど検討するダマスコのヨハネ(676-780)による『弁証論』の内容的順序と一致するためである<sup>2)</sup>。

アリストテレスの作品としては、自然科学関係の書目についても、この「マケドニア朝ルネサンス」の時期にちょうど重なるように写本が現れている。すなわち、『自然学』『天体論』『生成消滅論』『気象論』、それに『靈魂論』『形而上学』、『動物部分論』の f. 344 までは、パリの E 写本(1853)があり、これは 9/10 世紀に遡る。またウィーンの J 写本(100)も 10 世紀に遡り、こちらは『自然学』『天体論』『生成消滅論』『気象論』『形而上学』を含んでいる。ちなみにアリストテレスの他の作品の写本伝承は次のようになっている。1) 『動物生成論』Z オックスフォード〔コルプス・クリスティ〕108, 9/10 世紀 2) 『ニコマコス倫理学』Kb フィレンツェ 81.11, 10 世紀 3) 『政治学』Vm ヴァティカン 1298, 10/11 世紀 4) 『弁論術』『詩学』Ac パリ 1741, 10/11 世紀 5) 『問題集』〔偽書〕P パリ 2036, 10 世紀。

1) 詳細は拙著『教父と古典解釈——予型論の射程——』（創文社、2001年）、37頁以降。

2) アレタスによる、この A 写本『イサゴギー』と『範疇論』冒頭への注釈の翻刻は M. Share (ed.), *Arethas of Caesarea's Scholia on Porphyry's Isagoge and Aristotle's Categories* (Codex Vaticanus Urbinas Graecus 35), Paris/Bruxelles 1994.

こうして、ポルフュロゲネトスが古典の写本を求めたことに即応するかのように、10世紀以降はアリストテレスの複製も活発化する。ポルフュロゲネトスによる「百科全書主義」は、アリストテレスをその根拠として構想されたと言えるかもしれない。実際、ビザンティン世界における高等教育は、常にアリストテレス研究にその中心を置いていたとされ、彼の著作は9世紀から16世紀にかけて1000点以上の手写本により伝承された。これは古代ギリシアの著作家の中で群を抜く(ちなみにプラトンの写本は約260点に留まる)。もっともアリストテレス主義がビザンティン世界に受容される際に、神学者たちは ①宇宙を導く神慮を排除する点 ②神の概念が、第五元素すなわちエーテル、つまり世界靈魂のかたちで表現される点 ③可視的事物が神と同様に永遠であるとする点 ④人間の靈魂が死を被り、ヌースのみが不死であるとする点 などを相容れぬ論点と考えていた<sup>3)</sup>。ここでは、アリストテレスの運動論に関しては、キリスト教教義と矛盾するとされた形跡がないことに注目しておきたい。

## II

ところで、先に挙げたダマスコのヨハネは「最後のギリシア教父」と称されるが、現行ビザンティン典礼で用いられている「8調」のシステムを発案して原型を定め、また「復活カーノン」の作者としても現在に名を留めている。

彼の主著『知識の泉』は、マイユーマの司教コスマス(675-752)宛ての序文から、ヨハネがこれを3部構成とし、まず「ギリシアの賢人たちの貢献」を提示し、次いで「異端の輩の戯言」を列挙し、最後に「真理の説明」に入る、という構想のもとにあったことが知られる<sup>4)</sup>。これに従えば、まず『弁証論』、次いで103項目より成る『異端論』、最後に100章より成る『信仰詳解』(*Expositio fidei*)が置かれるはずだったことは確実である。『信仰詳解』全100章の内容は、1-14:神論・三位一体論、15-44:天使・楽園・神慮など、45-81:キリスト論・贖罪論、82-99:洗礼、聖体、十字架崇敬等、100:復活 となっている<sup>5)</sup>。けれどもコッターによるヨハネ

3) cf. (art), "Aristotle," "Plato," in: *The Oxford Dictionary of Byzantium (ODB)*, Oxford 1991.

4) ダマスコのヨハネの原典テキストとしては、Bonifatius Kotter (hrsg.), *Die Schriften des Johannes von Damaskos*, Bd. 1-5, Berlin 1969-1988を用いた。以下典拠表示には、このコッター版による頁数・行数を併記して用いる。

の批判的校訂版全集では、まず第1巻に『基礎教理』(“I”),そして『弁証論』(“D”)が載るが、続く第2巻には『信仰詳解』(“F”)が置かれ、第3巻に『聖画像破壊派駁論』が収められたあと、第4巻によく『異端論』(“H”)が載る。このようなかたちで、一見『知識の泉』の総体としての構成が分断されたように扱われる背景には、この作品が負う写本伝承の次第がある。写本の総数は、『弁証論』が299、『信仰詳解』が252、『異端論』が79個ほどであるが、本来の著者の意図からすれば DHF の順に並べられねばならないはずであるにもかかわらず、この順に従う写本は724番写本1本(11世紀, ヴェネツィア, マルチャーナ, gr II 196; 以下コッターのナンバリングに従う)のみである。3作のうち、まず外されて扱われたのが第2部の『異端論』であり、これは『信仰詳解』の次に廻される傾向を取った。

さらに、ヨハネの『弁証論』内部の差異がここに関連する。『弁証論』には短本と長本の2種があるが、ヨハネ自身が前者に手を入れ、後に後者を公けにしたものと考えられている。両者の違いは章立てであり、前者は全50章、後者は全68章より成る。両者とも、ポルフュリオスの『イサゴゲー』、次いでアリストテレスの『範疇論』を詳解するという点で相違はないが、最も顕著な相違点は、『イサゴゲー』後半で5つの一般概念(類・種・種差・固有性・偶有性)相互の間に認められる共通点・相違点が論述される部分に関して、長本が順に章を割いて解説している(19-29章)のに対し、短本にはこれに相当する部分が欠けている点である。そのほか、『イサゴゲー』の解説に入る前半部において、長本では一般概念の解説のために必要ないくつかの予備概念(声、分割、本性上先立つもの、定義; 5-8章)を先んじて説明しているのに対し、短本にはこの部分(ないしそのための章立て)が欠ける。これらの相違により、結果的に両者は章数が異なるが、以上はいずれも『イサゴゲー』に関わる部分であるため、おそらくヨハネは、当初より『イサゴゲー』そして『範疇論』双方の主要点を解説する意向ではあったものの、短本を脱稿したのち、アンモニオスやエリアス、ダヴィドといった注釈家たちによる『イサゴゲー』

5) 当初のこの順序から逸脱して1-18, 82-100, 19-81の順序で収録する写本がかなりの数にのぼり、コッターはこちらのタイプを *Expositio inversa* (「逆転本」)、元来のタイプを *Expositio ordinata* (「原型本」と呼ぶが、内容的に「逆転」することはまったく無意味であるとしている。11世紀のM写本(401)が早い時期の逆転本として挙げられるが、さしあたりこの件は本稿での考察からは外れる。後出の注(6)を参照。

注解の経緯を詳しく参照する機会を得て、この部分を増幅させたものかと考えられよう。

写本伝承の次第からは、この『弁証論』と先の『信仰詳解』に関して、そのどちらを先行させて筆写するかという問題が生じたことが理解され、これが上記の『弁証論』短本 (D. b.)・長本 (D. f.) の内容的相違と微妙に関わる結果となった。いま、① 11 世紀の写本 ② DF ともに収録する写本 に限って調査するなら、これに該当する写本 18 本のうち、435(パリ 1105), 166(チェセナ, マラテスト蔵書 3.190), 196(フィレンツェ, ラウレンティアヌス IX. 19), 441(パリ 1111) の 4 本は FD の順に収録しており、この点が注目される。これ以外の写本は DF の順で収録するが、D. b. を収めるのは 407, 436, 515, 519, 528, 574, 594, 644, 678, 724 の 10 本、D. f. を収録するのは 279, 348, 401, 514 の 4 本であり、D. b. の伝承にしぼってコッターのステンマを参照するなら、その中に挙がるのは 435, 166, 724, 441, 407, 678, 514, 348 の 8 本に限られ、先に注目した FD 順の 4 本はすべてここに含まれる。ここから理解されるのは、11 世紀写本の場合、F が先行する場合は必ず D は短本だということである (166 : F1-158, D. b. 158-206, H207-234, 196 : F1-96, D. b. 97-110, 435 : F3-178, D. b. 179-230, 441 : F66-167, I167-171, D. b. 189-218)<sup>6)</sup>。13 世紀の 634(13 世紀, ヴァティカン, バルベリーニ 434 : F1-82, D. b. 82-106)についてもこれは当てはまり、コッターはこの写本を 435 と分岐して伝わったとする。他にも 546(12 世紀), 315, 378, 543, 634(13 世紀), 748(14 世紀), 210, 603, 732(15 世紀) が FD 型伝承で、D は D. b. である<sup>7)</sup>。

ここで注目したいのは、ヨハネ自身の言に従えば DF の順に収められるべきであるにもかかわらず、あえて FD の順に収める写本が一定数、しかも有力写本のうちに何故認められるのか、そしてそれらが何故必ず『弁証論』としては短本を載せたのか、という問題である。この理由としては、もし『弁証論』のテキストが長本であるならば、その前半部にはポルフェ

6) これらの 4 写本 435, 166, 634, 441 は、注(5)に記した「逆転」を起こしておらず、いずれも原型本である。したがって 441 を除いて、『弁証論』が起こされる直前に『信仰詳解』の「復活」の項目が来ることになる。441 では「復活」と『弁証論』の間に『基礎教理』が介在する。

7) FD 型で D. f. を載せるのは 14 世紀の 481 写本に限られるが、この際 F と D. f. とは連続して掲載されていない。

リオスの『イサゴゲー』関連の叙述が頻出し、写字生はこのことをヨハネによる『信仰詳解』からの流れに乗りにくいと考えたものと推測できるだろう。ヨハネの当初の意図はあくまで『弁証論』での基礎づけを経て『信仰詳解』へと進む、すなわち「哲学」⇒「神学」型の階梯であった。ところが写本伝承上、一定の写字生グループは「神学」⇒「哲学」型の階梯を選ぶことにより、「哲学」に進む直前に「復活」の論を置き、また「哲学」としてはアリストテレスの『範疇論』がより前面に出るものを選んだ、ということになるであろう。これは 11 世紀に発するグループと推定され、8 世紀当時のヨハネ自身の意向とは合致しないものの、おそらくはマケドニア朝ルネッサンスにおける、学の体系家としてアリストテレスを理解する主義の勃興に添ったものであったかと考えられよう。

この『弁証論』は、先に紹介したように、普通ポルフュリオス『イサゴゲー』とアリストテレス『範疇論』の解説であるとされる。しかしながらその内容・記述を子細に検討すると、アリストテレスの著作に関してヨハネは、『範疇論』のみならず、他の著作たとえば『自然学』や『天体論』における記述をも加味し踏まえていることが理解される。たとえば『弁証論』第 45 章（短本）は「運動について」と題され、次のようないくつかの興味深い特徴を示している。①章の冒頭で「運動とは、可能態にあるものの完全現実態化であり、可能態における銅が彫像と化すような場合である」という一節があるが（129.1-2）、このような表現は『範疇論』には見当たらず、『自然学』（201a11, 195a6）などにその典拠を求めうる。②『範疇論』には円環運動についての言及が見当たらないのに対し、ヨハネの『弁証論』では「運動」の一部として円環運動が考慮されている（129.11）。③「天上的な運動には、これに逆行する運動は存在しない」という表現が認められるが（130.34）、これはもとより『範疇論』には見られないもので、アリストテレスの中では『天体論』（270a20, 286a3f.）、あるいは『自然学』第 8 巻などの表現として取り出すことができる。④ヨハネ自身がアリストテレスの『自然学』写本を手にして読んでいたことが明示される（131.46）。

### Ⅲ

さて、現行ビザンティン典礼の典文のなかには、先の皇帝ポルフュロゲネトス、それにその父親であるレオの手に遡る部分がある。ビザンティン典礼の主な祈祷としては、晩課、朝課、聖体礼儀それに時課が挙げられ、

このうち年間の標準的な朝課は、その概要を次のようにまとめることができる（〈 〉内は歌詞の名）<sup>8)</sup>。1 開祭 2 ヘクサブサルモス（詩篇） 3 大連祷 4 〈主は神〉 5 トロパール 6 カティズマ 7 小連祷 8 カティズマ—リオン 9 多憐歌 10 復活讃歌 11 昇階唱 12 プロキメン 13 福音朗読 14 〈キリストの復活を目にして〉 15 詩篇第50篇 16 福音接吻ステイヒラ 17 連祷 18 カーノンⅠ-Ⅲ歌 19 イバーコイ 20 カーノンⅣ-Ⅵ歌 21 コンターク 22 イコス 23 カーノンⅦ・Ⅷ歌 24 Ⅷ歌カタヴァーシア前先句 25 カーノンⅨ歌前讃歌 26 カーノンⅨ歌 27 〈主は聖〉 28 「光の歌」 29 〈すべての霊は〉 30 讚美ステイヒラ（4~8） 31 福音ステイヒラ 32 大栄唱〔週日は小栄唱〕 33〔週日は先句ステイヒラ〕 34 〈聖なる神〉 35 トロパール 36 三重連祷 37 完遂連祷 38 閉祭。

ポルフェロゲネトスによる作とされているのは、このうち28「光の歌」と呼ばれる部分であり、一方31「福音ステイヒラ」の部分は父親のレオが作ったとされている。これらはいずれも、主日の朝課で朗読される「復活の福音」と連動している。この「復活の福音」は、計11箇所て構成されており、順に①マタイ28:16-20 ②マルコ16:1-8 ③マルコ16:9-20 ④ルカ24:1-12 ⑤ルカ24:12-35 ⑥ルカ24:36-53 ⑦ヨハネ20:1-10 ⑧ヨハネ20:11-18 ⑨ヨハネ20:19-31 ⑩ヨハネ21:1-14 ⑪ヨハネ21:15-25である。これらは、聖霊降臨の主日の翌週、「全聖人の主日」より、①から順に毎週主日の朝課（13の部分）で朗読する。復活週すなわち光の週には朝課での福音朗読はなく、復活節第2主日つまりトマスの主日から第8主日である聖霊降臨の主日までは、11個のうちから各々の日に定められた箇所を朗読する。そして「光の歌」も「福音ステイヒラ」も11種あり、①から⑪の朗読箇所と一致する番号のものをその主日に読む。

次に復活週における朝課の次第を記すことにしよう。この週は、次のように構造が簡素化する。①開祭 ②先句+〈キリストは復活し〉 ③大連祷 ④復活カーノンⅠ-Ⅲ歌 ⑤イバーコイ ⑥復活カーノンⅣ-Ⅵ歌 ⑦コンターク ⑧イコス ⑨〈キリストの復活を目にして〉 ⑩復活カーノンⅦ・Ⅷ歌 ⑪Ⅷ歌カタヴァーシア前先句 ⑫復活カーノンⅨ歌前讃歌 ⑬復活カーノンⅨ歌 ⑭「光の歌」 ⑮〈すべての霊は〉 ⑯讚美ステイヒ

8) 表記はハンガリー語式による。cf. 拙稿「『聖週間』から「光の週」へ——「パラクリス」の意義づけに向けて——」、『文藝言語研究 文藝篇』55, 筑波大学大学院文芸・言語専攻, 19-157, 2009年。

ラ ⑰「復活祭のステヒラ」 ⑱三重連禱 ⑲完遂連禱 ⑳閉祭。

復活週には、朝課で福音朗読がなくなるという興味深い現象だけでなく、「復活」という超自然的な事象を表現するために、さまざまな典礼式次第上の工夫が行われる。まず上表には「復活カーノン」という部分が現れる。「カーノン」とは、ビザンティン典礼の朝課に特徴的な部分であり、旧新約聖書の9つの讃歌を基盤とし、各々で扱われるテーマに沿って、日々の性質に基づく観想により展開される詩連である。その原典は①出エジプト記 15:1-19 ②申命記 32:1-43 (通常用いられない) ③サムエル記上 2:1-10 ④ハバクク書 3:2-19 ⑤イザヤ書 26:9-20 ⑥ヨナ書 2:3-10 ⑦ダニエル書 3:26-56 ⑧ダニエル書 3:57-88 ⑨ルカ 1:46-55; 68-79 であり、この「カーノン」はいわば「予型論の集大成」といった趣を有する。この「カーノン」の様式が豊かに展開されたのは、7世紀ごろにおけるエルサレム東方のサヴァ修道院であり、その頂点に位置するのが「復活カーノン」である。そしてこの「復活カーノン」の作者は、先のダマスコのヨハネである。

ところで、復活の主日の朝課、すなわち実際には聖土曜日の夜半から始まる復活徹夜祭は、一年の典礼の中で頂点に位置づけられるが、ビザンティン典礼ではこれを朝課の枠組みで行う。そしてそれ以降の一週間、すなわち「光の週」における朝課の次第は、基本的にこの復活徹夜祭と同様の構造を呈する。端的に言えば、この一週間はいわば「毎日が復活の主日」と化し、曜日の交替が消滅する。そしてこの間毎日、カーノン部で歌われるのがこの「復活カーノン」なのである。

一方、晩課に関する年間の一般的な構造は次のようになっている。一. 「常なる初め」 二. 詩篇第 103 篇 三. 大連禱 四. カティズマ 五. 小連禱 六. 〈主よあなたに向かって〉 七. 〈主よあなたに向かって〉の後のステヒラ 八. 〈神の穏やかなる光〉 九. プロキメン 十. 三重連禱 十一. 〈われらの主よ、この夜〉 十二. 完遂連禱 十三. 先句ステヒラ 十四. 「聖シメオンの歌」 十五. 〈聖なる神〉 十六. 大散会定式。

復活週には朝課と同様、晩課も次のように単純化する。Ⅰ開祭 Ⅱ先句+〈キリストは復活し〉 Ⅲ大連禱 Ⅳ〈主よあなたに向かって〉 Ⅴ〈主よあなたに向かって〉の後のステヒラ Ⅵ〈神の穏やかなる光〉 Ⅶプロキメン(+福音書朗読) Ⅷ三重連禱 Ⅸ完遂連禱 X 1個ステヒラ+「復活祭のステヒラ」 XI 大散会定式。

「光の週」は、その他朝課・晩課に関して興味深い特徴を呈する。まず



上記のように、「復活祭のステイヒラ」（作者不詳）が朝課（⑰）と晩課（X）で唱和される。この「復活祭のステイヒラ」が用いられる背景には、ビザンティン典礼特有の「8調」なるシステムがあり、これもダマスコのヨハネの創案になるとされる。これは聖週間と、復活祭から翌日曜日までの「光の週」を除き、基調となる8つの調べを順に各週に配し、復活祭翌週の「トマスの主日」を第1調として年間を貫く歌調システムで、教会が天上界のかたどりであることを表現したものである。この「8調」システムあるいは「復活カーノン」など、ダマスコのヨハネの発案になる種々の讃歌や式次第は、ビザンティン典礼の式次第へと取り込まれ、おそらく11世紀ごろにその全容がほぼ完成し、ほとんど現行の典礼と大差ない形に整えられたと考えられる<sup>9)</sup>。

まず年間の主日朝課では30の「讚美ステイヒラ」で8個ステイヒラが歌われるが、その前半4つに関して、光の週には曜日により調を順に変えながらステイヒラを選ぶ（⑯，⑰）。後半4個分は「復活祭のステイヒラ」である。前半についてその次第は、復活徹夜祭では第1調、以下月・火……の順に第2, 3, 4, 5, 6, そして復活の土曜日の朝課では（一週間は7日しかないため）第8調を用いる。そして翌日の「トマスの主日」から年間のサイクルが始まり、第1調に戻る。

次に「光の週」の晩課では、〈主よあなたに向かって〉の後のステイヒラ（V）として6つが歌われるが、その次第は、復活主日当日の晩課が年間の主日前晩晩課の第2調となり、以下順に第3, 4, 5, 6, 8調が用いられる。また「先句ステイヒラ」（X）では朝課と同様に「復活祭のステイヒラ」が歌われるが、その前に毎日一個ずつ主日前晩晩課の「先句ステイヒラ」が採られる。その次第は主日晚から順に2, 3, 4, 5, 6, 8調である。なお聖土曜日の晩課は聖バジル典礼と合体した形で行われ、したがって後半部分が切り取られているため、晩課前半に該当する〈主よあなたに向かって〉の後のステイヒラだけが歌われることになるが、その際、当該日固有の祈祷文によるステイヒラの前に、主日前晩晩課の第1調から3個、先句ステイヒラから1個を採る。こうして、聖土曜日晩の典礼ではすでに復活が遠望されている。

「光の週」に続き、トマスの主日には基調が第1調に戻る。ここから

9) たとえば「8調」という語彙は11世紀以降に見られるようになる。cf. (art), "Oktoechos," in: *ODB* (op. cit.).

「油を携える婦人たちの主日（第2調）」、「足の不自由な者の癒しの主日（第3調）」、「サマリアの婦人の主日（第4調）」、「盲目の者の癒しの主日（第5調）」、「第1ニケア公会議の師父たちの主日（第6調）」、「聖霊降臨の主日（第7調）」、そして「全聖人の主日（第8調）」というふうな、週ごとの基調が順に数を増し、「全聖人の主日」の翌月曜日より、年間通常の8調書の平日使用に戻って完全に週日化する。この際、「光の週」には「復活の主日」性が継続したのに対し、トマスの主日から「全聖人の主日」までは、週日にも基調として年間主日のための祈祷歌が用いられることで「主日性」が継続する<sup>10)</sup>。つまり、すべては「復活の主日」を基点として、①翌月曜方向への円環 および②翌主日から始まる翌週方向への円環 というヨコ×タテの円環運動で構成され、この世を超越する8の調で支配された空間が構成されることになる。その中心に位置するのは復活のイエスである。

#### IV

先に「光の歌」について述べたくだりにおいて、光の週には朝課での福音朗読はなく、聖霊降臨翌週からの年間主日において、11個の福音朗読箇所が1サイクルを形成するという点を指摘した。これらの朗読箇所に関しては、非常に興味深い特徴がある。11個の朗読箇所のうちマタイ福音書に関して、11個のうちに含まれている28:16-20は宣教に向けての弟子の派遣を語るくだりであって、その直前に当たる28:1-20にイエスの復活に関する記述が含まれているという点である。このマタイ福音書における復活の記述は、先の年間主日における福音朗読からは外されて、聖土曜日の晩課+聖バジル典礼の際の聖書朗読に含まれる。聖土曜日の晩課は復活徹夜祭に先立つが、この聖土曜日の夕刻において「死」から「復活」への過ぎ越しが行われることは、晩課と聖バジル典礼の境界部にこのマタイ福音書28:1-20の朗読が位置づけられ、その朗読に先立ち、司祭が式服を赤色から白色へと一変させるといった象徴的光景によって表される<sup>11)</sup>。そしてその朗読に引き続き、キリストの復活を前提とする聖体礼儀が、聖金曜日をはさんで聖土曜日夕刻に再開される。

さて、年間主日朝課における福音書朗読のサイクルは、宣教に向けての

10) cf. *Dicsérvjétek az Úr nevét!*, Nyíregyháza 1993, 434; 864.

11) cf. Ivancsó István, *Görög katolikus szertartásban*, Nyíregyháza 2000, 161.

弟子の派遣を語るマタイ福音書 28:16-20 を筆頭に、それ以外はすべてイエスの復活を語る計 11 個の朗読箇所でもって形成される。光の週の朝課には福音朗読はおこなわれないが、復活主日の晩課には、復活したイエスによる弟子たちへの現われを記すヨハネ福音書 20:19-25 が配される。それに先立つ同日の聖体礼儀はヨハネ福音書冒頭箇所が多言語によって朗読され、福音がすみやかに世界中に伝えられることを表す。こうして復活週にあっては、もはや復活を告げる福音書が朝課で朗読されることなく、ただ「復活カーノン」を毎朝歌い、「復活祭のスティヒラ」を毎朝夕に朗誦し、この週を通して「8」で象徴される永遠的サイクルを刻んで回転する共同体がそこに現出するだけとなる<sup>12)</sup>。このあり方は、ある意味で、聖書という証言の説明方式をすら抛りどころとする必要のない、復活体そのものの現存を証しするための工夫だと言えるかも知れない。

ポルフュロゲネトスは、先に見たように 11 個の復活福音朗読にあわせてかたちで「光の歌」を作成した。つまりこの 10 世紀中盤には、この部分以外の朝課の枠組みがすでに完成されていたものと考えられる。「光の週」を満たす復活のイエスは、まず使徒たちに代表される共同体に円環運動を生起させ、次いで復活を告げる福音のかたちで年間主日における復活の壽ぎを催させる。その主日は、年間を貫く 8 調のシステムによる連鎖を通じ、まずトマスの主日に始まる 8 週間において円環運動の空間を構築しつつ、すべてを永遠的円環運動へと招く。このように理解するならば、ビザンティン典礼は、いわばアリストテレス的な運動論を具現させた一つの表現と見なすことができるだろう。その祖型を完成させたのは、上述のように 8 世紀ごろのダマスコのヨハネであり、10 世紀のポルフュロゲネトスに到るまでに、9 世紀のテオドロス (759-826) らを中心としたストゥディオス修道院での整備があった。テオドロスらは、元来ビテュニアのサックティオン修道院に起居していたが、799 年首都に逃れ、ストゥディオス修道院に移った。テオドロスは聖画像破壊論争の中で、写本筆写活動を活性化させ、筆写に適う小文字体を開発するとともに、先に言及したエルサレムのサヴァ修道院を修道生活の範とすべきだとの見解を抱き、エルサレム総司教にサヴァ修道院の修士たちを派遣するよう要請した。遑ってサ

---

12) なお対象は異なるものの、「8」を基調にヨハネ福音書の構造を読み解いた試みとして、宮本久雄「他者との想起的出会いと pneuma 言語——ヨハネの言語宇宙から——」(『福音書の言語宇宙』第二部、岩波書店、1999 年)を参照。

ヴァ修道院は、614年ペルシアによるエルサレム略奪の後、クレタのアンドレアス(660-740)やダマスコのヨハネ、マイユーマのコスマスらの讃歌をもとに、大幅な改革と刷新を経験していた。それまでストゥディオスでは、典礼様式として「アコイメトイ(不眠修道士)のアコルティア」と呼ばれるものが支配的であったが、これ以降サヴァ修道院の慣習を吸収し、折衷様式となったとされる<sup>13)</sup>。

## V

先に第Ⅱ章において、11世紀におけるダマスコのヨハネの写本伝承のうちに、『信仰詳解』そして『弁証論』の順に彼の著作を書写する一群のグループがあったことを確認した。彼らは、ヨハネの元来の意図に反してまでも『弁証論』を後接させ、その冒頭部が『信仰詳解』の「復活」の項目記述に接続するかたちを採った。その際の『弁証論』の版は決まって短本であり、アリストテレスの『範疇論』の姿をより鮮明にとどめるタイプのものであった。彼らは写字生であって、原著者ダマスコのヨハネとは一線を画した存在である。しかしながら、アリストテレスの写本数がビザンティン世界では他を圧して多数に上ること、そして「オルガノン」に留まることなく、アリストテレスの他の著作にも写本筆写活動が及んでいたこと、遑ってダマスコのヨハネも『自然学』写本を手にしていただけ、などを併せ考えるならば、彼らビザンティン写字生たちの姿が浮かび上がってくるように思われる。彼らは、百科全書主義的博学主義をアリストテレスに代表させつつ、ほぼその全容を整備するに至ったビザンティン典礼の精神性、ダマスコのヨハネまでに築き上げられてきたギリシア教父たちの神学、そしてこの異教の叡智の全体を、いかにして齟齬なく融和させるかに腐心した共同体であったと言えるだろう。

もとより、アリストテレスによる天体論また運動論は、彼が単独で構築したものではなく、プラトンが『ティマイオス』篇を中心として展開したイデア論的宇宙論が先駆としてあったことがまず想起される。またアリストテレスはもう一方で『範疇論』に始まる精緻な述定方式の整備を展開したが、これはプラトンの「イデア論」への批判を端緒とする活動であった。『形而上学』において語られる「第一の不動の動者」の論は、これら起動因系列と形相因系列を統括するアリストテレスの結論であったと言えよう

13) cf. R. F. Taft, *The Byzantine Rite: A Short History*, Collegeville 1992, 58.

が、遡ればこれにもパルメニデスによる「球形をした〈存在〉」（断片 8.43）の開披を想起することができるだろう<sup>14)</sup>。ダマスコのヨハネにより『弁証論』のかたちで措定された「ギリシアの賢人たち」の叡智とは、アリストテレスの『形而上学』まで内包することを意図するものであったかどうか、それは判断するすべもない。ただヨハネはアリストテレスの『自然学』（そして『天体論』）を明らかに読破しており、それを 11 世紀の写字生たちは鋭敏に察知していた。こうして、ヨハネのこの知識を反映する『弁証論』は、純粋な神学記述である『信仰詳解』にもまして好まれ、筆写された。アリストテレスそしてギリシア哲学の全容に向かって開く扉とも言える『弁証論』は、復活したイエスをその根幹に前提してこそはじめて生命を帯びるものとなる。そして彼らが共同体として日々執り行う典礼とは、ギリシアの全叡智に対するこの賦活化を証しするための行為でもあったのである。

---

## 11-12 世紀における二つの学校

——ベックとラン——

矢内 義顕

本稿は、グレゴリウス 7 世（在位 1073-85 年）を中心として大規模な教会・修道院の改革が行なわれた 11-12 世紀における二つの学校、すなわち、カンタベリーのランフランクス（1010 頃-1189 年）とアンセルムス（1033/34-1109 年）によって発展したベックの修道院学校そしてランのアンセルムス（1050 頃-1117 年）とラドルフス（1131/33 年歿）によって発展したランの司教座聖堂学校を取り上げ、中世における制度と学知の問題を考える。

---

14) パルメニデスからプラトン、アリストテレスに至るギリシア哲学の展開については、井上忠『根拠よりの挑戦』（東京大学出版会、1974 年）、『哲学の現場』（勁草書房、1980 年）、および『パルメニデス』（青土社、2004 年）を参照。